

鏡塚発掘調査報告書

昭和42年10月1日

飯田市教育委員会

N000

H001

序

国道151号線のつけ替工事が飯田市竜丘桐林の塙原古墳群を通過する工事を始めることになった。

飯田市教育委員会は長野県教育委員会の指導および飯田建設事務所（長野県土木部）の協力によりこの道路敷となる古墳・埋蔵文化財包蔵地の発掘調査することになった。

飯田市教育委員会

報告書執筆者

鏡塙発掘調査団長 大沢和夫（飯田市松尾2110番地）
(飯田女子短大助教授)
(長野県考古学会長)

- 遺跡としての種類、員数および名称古墳、名称鏡塚
- 発掘した土地の所在 飯田市樹林2884番地
- 所有者の名称 長野県
- 当該土地の範囲 桐林2884番地の鏡塚直徑45mに及ぶ円墳であるが、今回発掘したのは国道の道路敷となる長さ20m巾10mの範囲である。
- 発掘當出者の名前及び代表者住所氏名 飯田市教育委員会 代表者 教育長 大沢勝美 下伊那郡高森町下市田
- 発掘担当者の職氏名 日本考古学协会会员 長野県考古学会会長 飯田女子短期大学助教授 大沢和夫
- 発掘の目的 国道151号線のつけかえ工事により、鏡塚の西端を削りとることに決定し、その工事が始まろうとしたので、破壊される以前に発掘をしようとした。
- 発掘の経過 鏡塚は直徑45m、高さ2.5mの低平な円墳で、大部分は牧内正七氏の所有の茶園である。今回国道151号線のつけかえ工事を行なうため、その西端200mの地を長野県土木部で買いあけた、その買い上げ終了の部分だけを発掘することにした。
発掘の経過日誌
 - 昭和42年6月6日 発掘担当者大沢は現地を視察
 - 6月11日 第一次発掘 発掘参加者は次の通りである。
 - 調査団長 大沢和夫
 - 調査団員 佐藤貢信、今村芳樹
塩沢仁治、木下平八郎、宮下勝美、神村透、宮沢恒之
 - 調査応援者 飯田女子短期大学学生 6名
下伊那農業高校生徒 9名
飯田東中学校生徒 1名
 - その他 飯田市教育委員会 渡辺亮蔵
飯田教育事務所 宮下之宏
人夫 3名使用

この日は暑い日であったが、調査は進み、葺石列の様子や、墳丘がなだらかの傾斜であるが、その脇は80cmの高さの石垣で終わっていることを明にし、数百片に及ぶ埴輪円筒片を採集した。

 - 6月12日 宮下勝美が墳丘の追加実測を行なった。
 - 6月18日 木下平八郎と宮下勝美
伴侶夫、人夫3人が残っていた部分を発掘した。この際鏡面片を発見した。大沢和夫も午後発掘に従事し、多くの埴輪円筒片を採集した。



(上 写真1 下 写真2)

- 6月20日 飯田市社会教育課長○木下謙、木下平八郎、宮下勝美と視察
 - 6月23日 木下平八郎、宮下勝美、宮沢恒之、伴信夫、宮川美佐雄、人夫3名追加発掘
 - 7月30日 第二次発掘
国道に並行して農道を作ると決定したので、第一次発掘の場より1.5m東で発掘調査することにした。発掘参加者は次の通りである。
- 調査団長 大沢和夫
調査員 木下平八郎、宮下勝美、今村善興、小林常治、神村 透、池野真周、宮沢恒之
人夫5人
- 当日は国道工事に来ていた吉沢工務所のブルートーバーの庇援を得て不要の土砂の取除きに能率をあげたので調査は進捗した。前回の発掘調査の原本古墳が前方後円墳ではないかとの疑問が起ったので、その解明に志したが、前方後円墳でないことが明にされた。墳丘頭に石庭のあること、埴輪円筒片が多く発掘されたことは一次発掘の時と同じであるが、埴輪円筒は二段に連れてられていたらしいこと、円筒と円筒との間隔が60cmであったらしいことが破片の発掘状況により考えられた。

9. 発掘の実況

昭和42年6月11日、いよいよ発掘調査にかかることとなった。まず調査員及び応援参加一同集まって大沢団長よりの指示を聞いた(写真1)後、4つの班にわけてそのうちの1班は墳丘の測量にあたり、他の

3班は発掘を開始した(写真2)。墳丘の高さは2.5mで低いものであったが底は45mに及ぶ大きいものであった(写真3)。発掘の進行して行くにつれ葺石が現われはじめ、所々より埴輪円筒の破片が発見されて来た。やがてそ

写真4

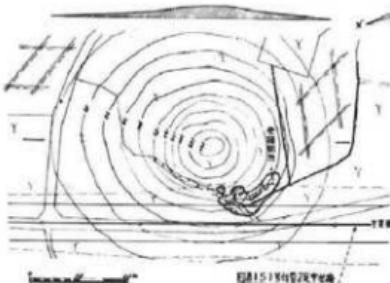


写真4 塚原四号墳(親母)実測図一縮尺図示



写真5 銀塚古墳の石庭 42.6.12 (宮下勝美氏撮)

測量ポールのおいてある所は葺石で、その下部に石庭が見える。ここが地中より掘り出された古墳の裾である。右の方は後にこの石庭の内部に何かないかと掘った試掘穴である。したがってその石庭は崩されている。

の跡石が石頭の形をなして残っていることがわかった。（写真5）これが墳丘の断面であった。石頭は地山より築かれ、内へ65°位の傾斜を示していた。（写真3）石頭の内部に何か構造は無いかと思ってピットをあけてみたが何も見出できなかった。（写真5）

7月30日第二次の発掘をした。前回の発掘の原本古墳は前方後円墳ではないかという一部の疑問があつたが、地主の関係で発掘できなかつた。今回は発掘の範囲が広まつたので、応援に来たブルトーラーの力を借りて発掘を進めたが、前方後円墳でないことが確認せられた。なお墳丘の断面を出すようにブルトーラーの力を借りたが墳丘の頭であるため、内部構造を知る何らの手がかりも得られなかつた。

（写真6）

10. 発掘した埋蔵文化財の概要

今回発掘したものは墳丘の西端の一部で全体の8分の1位の面積にすぎないので、石室等には（もしもあったとしても）発掘が及ばなかつたので、さしたる発掘遺物は無かつたが次のものが出土した。

写真6



埴輪円筒片 2000個に及ぶしかしいづれも赤褐色の小破片で断面を見ると砂利等を含み粘土は精選されていない。最大のものも長さ20cmには及ばない。しかし厚手（1.2cm）のものも薄手（0.9cm）のものもあり、色調も異なっており、製造場所が一箇所でないことは分った。（写真8）

復原してみると直徑37cmにも及ぶものがあるので、高さも1m以上のものもあったと考えられる形像埴輪片

その一部ではないかと思われるもの二片発掘された。（写真10）

須恵器片

厚さ0.4cm～0.6cmの破片が数個発掘された。断面は白灰色で表面に灰釉が施されている。瓶の頸部である。

土師器片

数個発見された。

11. 発掘した埋蔵文化財に対する処理

今回発掘したものは2000個に及ぶ埴輪円筒片が主なるものであるが、飯田市教育委員会では整理用の箱を製造したが、今の所保存場所がないので下伊那教育会の資料館に委託して保存して貯う予定である。資料館は鉄筋コンクリート2階建の耐火建築であるから。

12. 発掘に対する発掘担当者の考察

前述の如く今回の発掘は墳丘の一部を発掘したにとどめたが、この證據は盗掘が行なわれたかどうか明でない。もし将来本古墳の墳丘の頂上あたりが住宅、工場等の建築によって万が一破壊されるようなこと（是は可能な限り阻止しなくてはならないか）が発生した場合には、石室の破損も考えられるので十二分の日時をかけて発掘調査をその以前にしなければならない。

13. その他参考とすべき事項

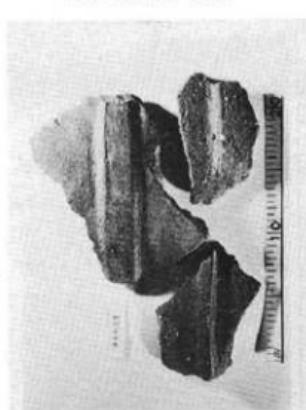
第一次発掘の状況については次の文献がある。

大沢和夫 編纂を据る（伊那1967年8月号）

埴輪円筒口縁部 写真7



埴輪円筒凸帯部 写真8



埴輪円筒底部 写真9



形象埴輪 写真10



鏡塚を掘る

大沢和夫

○
川路付近を飯田線で通過する時山よりに白いガードレールが見える。是か新しい国道151号である。この道を北の方へ延長して開智寺の裏を通りホツキの籠所を過ぎて毛賀沢橋へつなぐ新しい道をつくりつつある。即ち国道のつけかえ工事である。その道が本年いよいよ桐林の塙原古墳群を通過する工事を始めることとなった。それで飯田市教育委員会では県教委と連絡をとりこの道路敷となる古墳や埋蔵文化財包蔵地の発掘調査することになった。

○
さて今回調査したのは飯田市庵丘桐林2884番地にある鏡塚である。このあたりは塙原といい、その名のとおり、前方後円墳の双子塚をはじめ鏡塚・鏡塚その他十数基の存在したことは下伊那史第2巻471頁以下に記されている。この中で鏡塚は大きさから言うと5本の指に入るべき大切な塚であって下伊那史には「封土の全面は壇となつた。延東西26.1米、南北22.2米、高さは東側4.4米、西側3.2米の円形封土を残存するが南面の封土はかき崩されており、その面と西面とに石道をつんである。懸穴式の石室であつたらしく、その石は土どめのため丘頭の西面につかわれたということである」(塙原3号墳)と記されているが、第4号を鏡塚としてあるのはあやまりである。新国道がこの鏡塚を通過することになったと聞いて私は大へんなことになった、もし双子塚でも崩すことになったら、たとえそれがどんな理由であっても絶対にその道路コースには反対されなければならないと決心した。道も大切であるが双子塚こそ更に大切な日本人の文化遺産なのでしかし幸い県土木部でもこの文化財の価値を考えてなるべく塚と塚の間をねって通るよう道の設計をしている。その点は難かった。しかしどうしてもこの鏡塚の西端を通らねばならないことになって塙丘の20分の1位を削りとることになった。まごまごとしてブルドーザーが来てしまえば一たまりも無く崩されてしまう事である。ブルさんの来る前にとにかく学問的に調査しておきたい、でないと私達考古学に志す者は寝てもねむられない。こうした事情を飯田市教育委員会でも察知して、とにかく緊急に発掘調査をすることになりその仕事を下伊那考古学会に委嘱して來た。

この塚は以前にもたびたび行ったことのある古墳で、大きい割に高さの低いものであり、鏡塚という名のあるのは鏡の出たためにつけた名で既に誰かが以前に発掘したものと考えていた。それでもと思って6月6日に現地に行ってみた。塚の上にはまだ桑が残っていた。道路敷になるのはどの部分か、どういう方法で発掘したらいいかなど一人で考えた。道路敷になる所は県土木部の所有であるが残った塙丘は牧内正七氏の所有地なので、帰りに牧内氏を訪ね発掘のことを報告し桑を伐るよう依頼した。

○
6月11日 晴 午前9時に現地に集まつた。調査団長に大沢があり、調査員には下伊那考古学会の会員があたることとした。今回は飯田女子短大の郷土クラブ員6名と下伊那農業高校の郷土班員10名、そのほかに人夫3名が応援に来てくれた。

発掘するのは道路敷として県土木部が買収する部分だけで面積30m²位であり、古墳全体よりみると20分の1位の小面積の部分であるが、作物補償もいらないし、発掘後復旧する必要もない。道路にするのだからブルドーザーが平坦にしてくれるから、その点楽な発掘である。

塚を3つにわけて、佐藤透信君が第1トレンチ、今村善興君が第2トレンチ、木下平八郎君が第3トレンチの主任として下農生を指導して貰う。宮下藤美君が女子短大生を助手にして古墳の実測をはじめ、宮沢恒之君・塙沢仁治君・河合啓三君には記録係として記録をとったり出土品の保管にあたることを依頼した。

暑い日ざしとなったが時折雲が出て、風があるので比較的しのぎやすい。第1トレンチより草石らしいものが残されたというのが9時35分、聞もなく第3トレンチでは表面より20cm下から埴輪円筒の破片が発見された。その後所々に葺石や埴輪片が発見された。20×10m²位の比較的平たい感じの河原石を並べたもので塙丘全面にあるのではなく所々に残されているという様に見える。最初から所々に葺石を置いたものか、は

じめは全面的に葺石をしいて封土の崩れるのを防いだのであるが、後の耕作や桑の植栽その他の事情で大部分がとり払われてしまったものか、是は結局本日の発掘では最後まで未解決の問題として残された。

飯田市教育委員会の渡辺さん、飯田教育事務所の宮下さんが来る。地元の屯丘の方々も見学に来る。11時半一息入れて発掘を続ける。土がなかなか堅くて困難である。11時10分第1トレンチで葺石が上下二段ある表面より55cm下に葺石があり、それより少し高い位置に葺石がある、どうも階段状に葺石が葺かれているという見解である。第3トレンチでも似た形で葺石が見つかったが、こちらは一続きのものが途中で失われたものと考えられたので、よく調べると二箇所の葺石は一つづきになり傾斜は17.5度となっている。第1トレンチのものそれと同じではないかと思って上下のを結んでみると傾斜は同じ7度半。かなり緩い傾斜である。そしてこの傾斜をそのままのばすと頂上へつながる。

最初この塚を見た時に、面積が大きいのに比して高さが低く、この古墳はもとは高かったが振り崩されたのか風雨の侵蝕で低くなつたのかとも思ったが、この葺石の傾斜より考えると最初から大きく低い古墳であったと考えられる。すると本古墳は未発掘ではないのかとも考えなおして来た。ではこうした緩い傾斜の古墳は古い型式なのか新しい型式なのか。今のままで何の決め手もない。

○

ひる休みに下の家まで水を貰いに学生らが出来た。やがてお湯と茶碗を持って上って来た。下の原田さん方でわざわざお湯をわかして茶碗まで貸して下さったのである。縁もゆかりも無いのに有難いことであった。

1時発掘再開、暑い日射しとなった。第1トレンチと第2トレンチの間に発掘を行なうと同時に第2トレンチを西の方即ち墳丘の側の方へ延長した。17.5度の傾斜で葺石がすと続いている、そして所々より埴輪円筒の破片が出るが、不思議なことに葺石の下からもそれが出ることである。葺石の間に埴輪があってそれが何かの関係で深くなつたものであろうと思いつながら発掘する。そのトレンチの延長したあたりで土の色が変っている所があるのでこのあたりが墳丘の筋であろうと推定した。(これについては後の所を見ていただきたい)

午後2時10分第1トレンチでは葺石と粘土の段とで階段状になっていると佐藤君より報告があった、はたしてそうなのか、この部分だけではイエスともノーとも言えない。太陽は暑い、調査員の顔や腕が赤く日にやけて来るのが目につく、若い学徒らにも疲労の色がくせない。このあたりで今まで地表に露れた葺石の撮影をすることにした。傍晚・中日・毎日の記者が来た、丁度いい。席で人の足あとを書き消し、ブリシで葺石の面を磨き、桑の根を切り、美しくしてそこへカメラを向ける。これまで本日の仕事の山を越したと考えた。

○

葺石の撮影が終了して、では葺石の下には何もないだろうかと思いながら葺石を起しにかかった。午後4時であった。ところが、ところがである。葺石の一一番西側に並んでいるものを起したところ、その下にも石がある、またその下にも石が見出される。疲れた調査員が急に元気が出てきて石の外側を握りはじめた。今までの葺石の出た土は堅かったのに、今度石の列の外側を握ると土がやわらかい。どんどん掘り下げるうちに葺石の最後の所が丁度石垣のように石が上下に並んでいることを発見した。それらの石も葺石より少し大きさで25×15cm位のものが多く、しかも長径を奥の墳丘の方へ向けている。石垣である。石垣はどの位より積まれているかを調べようとしてその軟い土を握り下げること75cmで遂に黄色土に達した、ここは堅い、即ち地山である。古墳を第1前の地表面に達したのである。そして石垣の傾斜は50°～65°で勿論内側より外側へ傾斜を持っているのである。宮下君の測量によればこの地山の面はこの塚の西を走っている道路より11～30cm低いという。しかもこの石垣は大きく弧状をなしているのである、勿論墳丘の頂点を中心とした円弧の如き形をなしているのである。

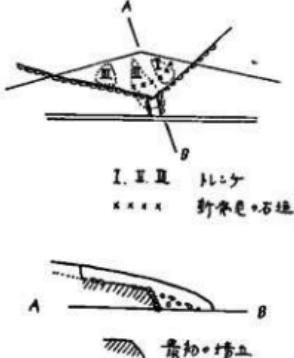
私はこの石垣こそ本古墳の筋であると思った。ゆるやかな傾斜をもった墳丘がここで急に石垣を作つて終わっている。こんな形をしていると考えた。(第2図)

○

午後5時になった、応援に来てくれた学生生徒と雇った人夫とを帰らせてあと数人となつた。

この時私は変な見方をしてみた。たしかにこの石垣は古墳の筋であろう。しかしこよによるとこの石垣は

第2図



石室の石室の如きもの一部ではないかと。一般に石室は古墳の中央に作られるが、時によると一古墳に二石室のある場合もある。主への穴式石室を設けた古墳の一隅に身近のもののかい式石室の設けられる場合だって考えられる。そう思ってみるとこの石室が要問になってくる。夕方近くになって調査員も減ってしまった。次の日曜日まで待っていたらブルドーザーが何をするか分らない。

調査員でどうするか相談をする。やろうーとにかくこの石室が古墳の裾ならそれでいい、もし石室の中に石室か何かがあつたらその時はそれで発掘方法を考えよう。下農の生徒がやりましょうという。そこで葬石の一部をはねのけて石垣の直角の方向に幅30cm位のトレンチを掘りはじめた。下に室もあるか、あれば面白いし、なければそれでいい。生徒の掘り進むシャベルを見つめていた。55cmまで深く掘り下がたが何もない、上方と同じ赤土層ばかり、石垣はやはり古墳の裾であった。

○

今村君が第2トレンチの延長部で葬石の下に埴輪円筒片の出ることに注意して不思議だと言ったことが是で理解された。埴丘の西端の低い墓石と思ったのは、埴丘表面にあった葬石の落ちこんだもので（それが自然的か人工的かはとにかくとして）石垣の外へ表面の傾斜の延長のように埋まっていたものであった。第2図（図参照）その葬石とともに埴輪が落ちた、だから石の下に埴輪片が出るわけである。考古学研究というものはこうしたことが多い。したがって無駄の仕事もあり、最初の予測と大きくなっていることが多い。それでいいのだ、こうして学問が進むのだから。

石垣は大きく弧状をなしている。西の道に面した部2.5mはほぼ直線になっているように見えるがやはり弧である。この弧の中心を求めれば古墳の本来の大きさがわかる筈である。目測したところ直径30mの円墳らしい。それで石垣の間の土を落し、ブラシで石の頭を磨掃して撮影する。石垣の外はもとの墳のあとかも知れぬが今日の時点では何とも言えない、前に述べたように地山が石垣の底の面よりあらわれたので隠はなかったのかも知れない。

大休発掘も日の暮れそうな時に大切なものが出土するのが下伊那考古学会の発掘の恒例である。今日もやはりそうであった。

○

木下君は一人熱心に石垣の外の石の間から埴輪円筒片のこなごなになっているものを発掘している。私は石垣の弧の上を歩きながらしまったと思った。発掘のはじめ畠と畠の境界であるので後の人の築いたものとして無難にとりはづしてしまった石垣のことと思いついた。地表に出ていた境界の石垣と今地下より掘り出された石垣とが弧状に連続できるではないか。そのことを怪しげにやっと気づくとは！……あの境界の石垣は最後まで残しておくべきであった。申し訳ないことであった、学問に対しても調査員に対しても。こうした石垣は必ずこの古墳をとりまいて土の下に埋もれているであろう、それを正確に掘り出したら古墳の真の姿がわかる筈である。しかしそれは第二期の発掘でなければわからない。

○

6時20分、夕暮近くになって埴丘の頂上に立って今日の発掘をふりかえってみた。

1. このままにしておけば一たまりもなくブルドーザーでやられてしまうこの遺構がとにかく調査でき記録保存できたことはうれしい。もし知らぬうちに削りとられたら永久に残念だったという心持が残ったであろう。
2. 墓丘はなだらかな傾斜で、高さ80cmの高さの石垣で終っていたことがわかった。
3. 葬石の配列の一部が明になった。
4. 墓丘円筒の破片は多くあった、重量にして4kg以上もあったが、原形のわかるものは一つも出土しな

かっだし、その配列が墳丘上どうなっていたかは今日までの所では明らかにされなかつた。
今私の立っている下には多分石室があるだらう、それが整穴式のものか横穴式のもの（下伊那にはこの方が多い）かはわからないが、多くの隨葬品に埋まつて古墳の主が眠つているのではなかろうか。

もしこの區道が全通した頃、なるべく今のまま残したいのだが、この古墳を平にして工場か店を作る時が来たら、その際には前以つて十分の用意をととのえて発掘調査しなければならない、それが先祖に対する我々のつとめであらう。

（42・6・13）

